

なぜ英語は主語と助動詞を倒置するのか

時崎 久夫

1. 問題

なぜ英語では、疑問文などで主語と(最初の)助動詞を倒置するのか。本稿では、英語と世界の言語の疑問表現を概観し、倒置で疑問文を作る言語が語頭強勢を持つことを述べる。英語は、語頭強勢が弱まり、Yes/No 疑問文で *do* を含む助動詞を文頭に置いてピッチの上昇を作り、文末の上昇調を先取りするという仮説を示す。

2. 英語における主語助動詞倒置と世界の言語

Huddleston and Pullum (2002: 95) によれば、英語で主語が助動詞と倒置するのは、倒置する助動詞の前に要素がない場合(1)-(3)とある場合（倒置は義務的または随意的）(4)-(9)である。

- (1) Yes/No 疑問文(Closed interrogatives)(一般に主節のみ): *Can she speak French?*
- (2) 条件文: *Had he seen the incident he'd have reported it to the police.*
- (3) 願望法(optative)の *may*: *May you both enjoy the long and happy retirement that you so richly deserve.*
- (4) Wh 疑問文(Open interrogatives)で *wh* 句が主語以外の場合(一般に主節のみ): *What does she tell you?*
- (5) 否定の非主語要素が節頭にある場合(節否定では従属節でも倒置): *Not one of them did he find useful.*
- (6) *only* が節頭にある場合(節全体を修飾する場合のみ): *Only two of them did he find useful.*
- (7) *so/such* が節頭にある場合: *So little time did we have that we had to cut corners.*
- (8) 感嘆文(Exclamatives)(随意的で、倒置しない方が一般的): *What a fool have I been!*
- (9) その他の要素が前置された場合(形式的な文体): *Thus had they parted the previous evening.*

このように、主語と助動詞が倒置する場合は多岐にわたるが、ここでは(1)の Yes/No 疑問文のみを扱う。

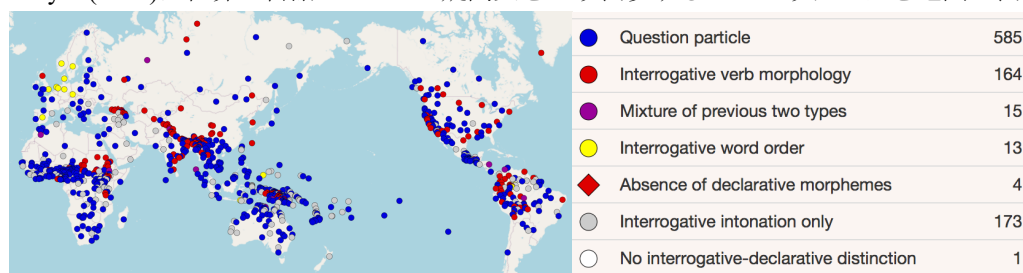
小野 (2015) は、生成文法の考えに基づき、英語と日本語の疑問文の構造を次のように示している。

- (10) a. [[Q Can] [s you *can* do it]]
- b. [[s 彼は来ました] [Q か]]

日本語では、動詞が文末にあるので、疑問文のマーク「か」を文末に付け、(現代) 英語では、動詞が文の前方にあるので、文頭に疑問文のマーク (Q) を付けるために助動詞が移動する、と小野 (2015) は説明する。

しかし、どのような言語がどのような方法で Yes/No 疑問文を表し、どのような言語が主語と (助) 動詞の倒置によって疑問文を作るのか、倒置を用いる言語は共通の特徴を持っているのか、という問題がある。

Dryer (2013) は世界の言語で Yes/No 疑問文をどう表現するかというデータを地図と表にまとめている。



このように、計 955 言語中、疑問の語順 (interrogative word order) を用いるのは英語を含めて 13 言語 (1.4%) にすぎない。Dryer (2013) が示す 13 言語のうち、主語と (助) 動詞の倒置を用いるのは 9 言語に限られるが、倒置を用いる可能性がある 4 言語を追加すると、次の印欧語族の 13 言語となる。

- (11) a. Germanic (Danish, Dutch, English, Frisian, German, Norwegian, Swedish)
- b. Romance (Spanish, (Italian, French))
- c. Slavic (Czech, Slovak, (Upper) Sorbian)

3. 倒置と音韻

(11a) のゲルマン諸語は、ゲルマン祖語の段階で語頭強勢 (initial stress) を持っていた (清水 (2012: 63))。そして語頭強勢はラテン語などのイタリック語派でも共通であったという説がある (Venneman (2010: 395))。ゲルマン諸語の多くは、その後、語頭に弱音節を持つようになり、接頭辞の弱音節を除く語幹第一音節強勢 (stem-initial stress) になったが、その基本的性質として語頭強勢を保存していると考える。Goedemans and van der Hulst (2013) によれば、イタリック語派のロマンス諸語 (11b) は、現在では語末第 2 あるいは語末音節に

強勢を持つ。またスラブ語属では、(11c) の3言語（チェコ語、スロバキア語、ソルブ語）だけが語頭強勢を持ち、その他は語末近くあるいは語全体（unbounded）に強勢を持つ。すると、主語と（助）動詞の倒置が起こるためには、語頭強勢（を持っていたこと）が必要条件であると考えられる。

では、語頭強勢と倒置が関連している理由として、語強勢の位置が句強勢の位置および節における強勢位置と平行しており、語頭に強勢を持つ言語は節頭にも強勢を持つことが考えられる。強勢のある節頭の位置に、Yes/No 疑問文の焦点となる動詞を置くことで、話者は疑問の意図を明確に伝えることができると思われる。

倒置が、強勢によるものだとしても、なぜ英語では疑問文で *do* を含む定の助動詞のみが主語と倒置するのか。筆者の知る限り、疑問文で倒置を用いる他の言語はすべて、助動詞がない場合に定動詞を主語の前に置く。

まず、史的事実として、英語では助動詞 *do* を発達させた。中島（1979: 219）によれば、中英語の *dōn* が *make, act, put, cause* の意味を持ち、不定詞とともに使役動詞を作った（*do them sink*）。そして語順が *do sink them* と変化して *do* が助動詞と感じられるようになり、*do* の使役の意味が薄れて肯定文では強調を示すものとなった。この *do* が疑問文と否定文でも用いられるようになり、16 世紀に *What think you?* が *What do you think?* になった。中島（1979: 220）は、*do* の倒置は、次第に確立してきた SVO の語順を乱さないためであると考えている。*do* によって SV の語順を守ったということであるが、この考えに根拠があるかは不明である。

ここでは、助動詞と主語との倒置により文頭にピッチの上昇を作ることによって文末の上昇調と合わせる、という考えを提案する。まず英語は、ノルマン征服以来、古フランス語の流入により、本来の語頭強勢と、ラテン的な語末指向強勢の競合が起こり、強勢位置が語末方向に移動していった。この点で英語は、ドイツ語のような他のゲルマン諸語より、ロマンス諸語的な強勢位置になっている。現代のロマンス諸語が主語と（助）動詞の倒置をあまり用いなくなっていることを考えると、英語でも、語強勢を持つ動詞を疑問文の文頭に置くことを避けるため、助動詞 *do* と主語の倒置を発達させたと考えられる。

助動詞で節を始めることにより、節の冒頭は強勢を持たずにすむが、主語が代名詞の場合はそれに比べてある程度の強勢を持つと言えるかもしれない。

(12) a. Does Jóhn speak Frénch?

b. Does he speak Frénch?

しかし、(12a)と(12b)の両方において、助動詞 *do(es)* は低いピッチで発音され、次の主語は高いピッチとなる。一般に Yes/No 疑問文では、文末が上昇調となるが、これを文頭のピッチ上昇が先取りしていると考えられる。

このように考えると、英語で主語と助動詞を倒置して Yes/No 疑問文を作るのは、文頭に強勢を持たない助動詞を置いてピッチを低くすることで、次に来る主語の高いピッチとで上昇のイントネーションを作り、文末の上昇調と呼応させるためという可能性が考えられる。ただ、これは1つの仮説であり、検証が必要である。

4. まとめ

本稿では、英語ではなぜ主語と助動詞を倒置するのかという問題について、Yes/No 疑問文に絞って、言語類型論と音韻論の観点から考察した。Yes/No 疑問文を主語と（助）動詞の倒置によって表現する言語が世界では少なく、語頭強勢（を持っていた）という特徴を共有することを指摘した。さらに助動詞 *do* を用いて助動詞のみを主語と倒置させる英語は特殊であり、それは強勢位置の語末方向への歴史的変化に伴い、文頭の強勢を避け、文頭でピッチを上昇させることにより文末の上昇調と合わせるためであるという仮説を提示した。

参考文献

- Dryer, Matthew S. 2013. Polar Questions. In Dryer, Matthew S. & Haspelmath, Martin (eds.) *The World Atlas of Language Structures Online*. Max Planck Institute for Evolutionary Anthropology, Leipzig. <http://wals.info/chapter/116>.
- Goedemans, Rob and Harry van der Hulst. 2013b. Weight-sensitive stress. In Dryer, Matthew S. & Haspelmath, Martin (eds.) *The World Atlas of Language Structures Online*. Max Planck Institute for Evolutionary Anthropology, Leipzig. <http://wals.info/chapter/15>.
- Huddleston, Rodney and Geoffrey K. Pullum. 2002. *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge University Press, Cambridge.
- 中島文雄. 1979. 『英語発達史』（改訂版）. 岩波書店.
- 小野隆啓. 2015. 『英語の素朴な疑問から本質へ——文法を作る文法——』 開拓社.
- 清水 誠. 2012. 『ゲルマン語入門』 三省堂.
- Venneman, Theo. 2010. Contact and prehistory: The Indo-European Northwest,” Hickey Raymond (ed.) *The Handbook of Language Contact*. 380-405. Wiley-Blackwell, Chichester.